

トニ・モリスン『デズデモーナ』－民族・階級の視点から－

○日大生産工・福島 昇

2003 年頃、オペラ指揮者のピーター・セラーズとトニ・モリスンの間で、シェイクスピアの『オセロー』にどのような意味があるのか激しい議論があった。セラーズはデズデモーナの悲劇は彼女が単純すぎるくらい善人で人種的感覺が絶望的に古いからだと言った。

セラーズの言い方では、この劇は「賞味期限のすぎた商品」だという。モリスンはそれに反対し、自分ならもっと優れた『オセロー』を演出できると挑戦的な言い方をした（Kaufmann）。

2009 年、セラーズは斬新な演出のオペラ『オセロー』を作った。一方、モリスンはセラーズとの議論の成果として、全 10 章からなる戯曲『デズデモーナ』を創作し、2011 年 10 月 13 日にパリ郊外にあるテアトル・ナンテール・アマンディエールで上演した。セラーズが序文を書き、モリスンが脚本を書き、ロキア・トラオレがマリの言語であるバンバーラ語から英訳された歌と歌詞（第 3 章と第 8 章を除く各章に挿入されている）を作るという翻案音楽劇である。トラオレはマリ出身のシンガーソングライターである。2011 年 5 月にウィーンで、7 月にブリュッセルでも上演された。

このような過程をへて、『デズデモーナ』は 2 時間 15 分かかる劇となった。『デズデモーナ』はデズデモーナとバーバラ、エミリア、そしてオセロー、あるいはマダム・ブラバンショーとソウンなどとのあいだの親密で深淵な会話から成り立っている（Anon., *Los Angeles Times*, October 28, 2011）。数世紀にわたる人種差別と植民地主義が経過した今なお、ポストコロニアリズムの視点に立つこのデズデモーナとバーバラという 2 人の女性の会話は鋭利で力強い。

さて、シェイクスピアの『オセロー』の「砦の一室」の場で、デズデモーナはイアーゴーの妻エミリアに次のようにいう。

私の母にバーバラという小間使いがいたっけ。その娘が恋をしたの、そのうち相手の男が気が変になって、その娘を捨ててしまったのです。「柳」という歌が好きだった——古い歌だけれど、文句がああ娘の運命そっくり、最後はそれを歌いながら死んでゆきました。今夜はそのうたが私の頭を離れない。

どうしたのか、あのかわいそうなバーバラのように首をかしげてそれを歌ってみたくてしかたがないの。（第 4 幕第 3 場）

デズデモーナは、キャシオーとの不倫関係を疑うオセローの「恥を知れ、売女！」（4.2.81）に恐怖を覚え、死を予感し、母親にバーバラという小間使いがいたことを思い出し、「『柳』を歌ってみたくてしかたがない」。モリスンはデズデモーナのこの台詞から、バーバラとデズデモーナとの関係を人種と階級の問題からとらえ直し、『デズデモーナ』を創作する。デズデモーナは自分をバーバラに、オセローを「気が変になって、バーバラを捨ててしまった」相手の男に例え、「柳」の歌を歌いながら死んで行くバーバラの運命を自分の運命に重ねようとする。不思議なことだが、悪党イアーゴーは一度も登場せず、すべてデズデモーナの視点から描かれている（Sciolino）。イアーゴーがいっさい登場しないのは、この戯曲に登場する人物は全て「来世」（48）の世界から現れるという設定であるからだ。モリスンの解釈によれば、シェイクスピアの『オセロー』では、イアーゴーは死刑に処せられることを匂わせるだけであって処刑されたかどうかはわからない。しかし、モリスンは「イアーゴーは独房で苦しんでいる」（53）とキャシオーに言わせている。

このほか、デズデモーナの母親で元老院議員の妻、マダム・ブラバンショーや、オセローの母親ソウンなどが新たにこの戯曲に加えられている。

『デズデモーナ』は『オセロー』の材源であるチンツィオの『百物語』第 3 編第 7 話との関連性はない。また、オセローはキリスト教に改宗してヴェニス公国に仕える有能な軍人であるが、宗教上の問題はあつかっていない。

『デズデモーナ』はシェイクスピアの『オセロー』の新しい解釈である。モリスンはかつて、『タール・ベイビー』によって『テンペスト』の新解釈を施した。『テンペスト』について「理想的」な読み方と「修正的」な読み方をし、『テンペスト』をこの 2 つの読み方の交差点におき、『タール・ベイビー』の登場人物ヴァレリアンの中にプロスペロ、ジェイディーンにミランダ、サンにキャリバン像を見て、ヴァレリアン＝ジェイディーンにミランダ、サンにキャリバン像を見て、ヴァレリアン＝ジェイディーンに欧米中心主義

Toni Morrison's *Desdemona*:
From the viewpoint of race and class
Noboru Fukushima

的基準に疑問を呈している (Walther 137-149)。

本発表の目的は、モリスンが「理想的」な読み方と「修正的」な読み方という2つの読み方を通して、いかにシェイクスピアの『オセロー』をベースにした『デズデモーナ』を創作したかについて比較・検討し、なぜ女性と黒人という弱者の視点から『デズデモーナ』を創造したのか、なぜデズデモーナやオセローやバーバラなどの死者を通して、登場人物を対峙させたのかなどについて、第8章と第9章を例にあげ人種、階級の視点から考察するものである。

第8章は、イーゴーの妻でありデズデモーナに忠実に仕え殉じたエミリアとデズデモーナとの対話になっている。

モリスンは女性同士の友情についてインタビューの中で「女性は男を最初に選ぶ、それから第2の選択として女性を選ぶ。でも私は、女性の友情というものが本当はどういうものなのかを探り当てるために作品の中心点に女性を据えるのです」(McKay 410) (拙訳) と語っている。このモリスンの言葉どおり、モリスンは作品の中心に女性同士の関係を置く。『スーラ』におけるネルとスーラとの関係、『ビラヴド』におけるセサとデンヴァーとの関係、『マーシー』におけるフローレンスとリーナとの関係と同様に、デズデモーナとエミリア、デズデモーナとサラン(バーバラ)、そしてマダム・ブラバンショールとソウン、といった女性同士の関係こそがモリスンのあてる焦点の中心である。

エミリアはデズデモーナの「ピンを外して、エミリア」(43) とか「敷布をしいておいて、エミリア」(43) などの指図に献身的に勤めた、というが、モリスンは『タール・ベイビー』のなかでもヴァレリアンとシドニーという主従関係の複雑な心理を描いている。

エミリアはデズデモーナの指図を「これは友達の扱いじゃない。召使いの扱いだわ。誰かあなたの下で働く人の扱いだわ、献身を当然だと思っている階級の下で働く人の、ね」(43) と彼女を非難する。エミリアのデズデモーナに対する献身は、階級差別からきたものであり、必ずしも本意ではなかったというのがモリスンの解釈である。

『デズデモーナ』では、孤児だったエミリアは「孤児は愛がいかに早く冷めていくかわかっている。完全な安全は子供の絶望的な夢だとわかっている」(44) というがモリスン作品には『青い眼がほしい』のピコーラを初めとして多くの孤児が登場する。『スーラ』のなかでは、スーラの祖母であるイーヴァ・ピースは屋敷に3人の孤児を引き取り、すべてデューイと名付ける。『ジャズ』のなかでは、アリス・マンフレッドは自分の妹の

娘で孤児になったドーカスを引き取る。このようにして、モリスンはシェイクスピアのエミリアとはまったく異なるエミリアを創造したのである。

第9章は「来世」のデズデモーナとその母の小間使いだったバーバラ(アフリカ名の本名はサラン)との対話が展開される。デズデモーナはサランの本名さえも知らず、バーバラと呼ぶが、サランは、バーバラは白人がアフリカの「野蛮人」(45) をさすときに使う言葉という。サランは「私の肌は黒い。あなたの肌は白い」(45) と人種問題を持ち出すが、バーバラが黒人であったというのがモリスンの解釈である。サランは「だからあなたには私のことはわからない。あたしのことを理解したことはない」(46) というが、モリスンの黒人对白人の構図は単純ではない。モリスンはでっかいあげられた黒人という存在(モリスンはそれをアフリカニズムと呼ぶ)は、英米文学に大きな影響をおよぼしてきたが、アフリカニズムの定義を「アフリカ民族が表すようになった表示的かつ暗示的暗さ、それから、これらの人々についての意見、思いこみ、理解の仕方、ヨーロッパ中心の学問につきものの誤解の総体をさす」(*Playing in the Dark* 6-7) と主張する。

サランはデズデモーナに悲しい現世を思い出させる「『柳』の歌はもう結構だわ」(48) といひ、次のように「来世」の新しい歌を歌う。

あなたはもう二度と決して死なない。
なんという至福を知ったのだろう。
私はもう二度と決して死なない。(49)

現世では、サランは「野蛮人」を意味するバーバラとして階級差別に苦しみ、言わば牢獄の中で生きたが、「来世」の世界では「柳」の歌は必要なく、新しい歌を歌うのである。「二度と決して死なない」の繰り返しに、不運だった女性の悲しみが舞台に響きわたる。歌い終わると、2人は互いに顔を伏せる。新しい歌はモリスンの理想的な歌であろうか。

このように、モリスンは『デズデモーナ』を民族、階級の視点から創作(翻案ミュージカル)したのである。

参考文献

福島昇・木内徹「“You were not killing me. You were killing Othello”——トニ・モリスン『デズデモーナ』論」『英語文化研究』東京：成美堂、2013. 232-249. Printを参照。

*本発表は、JSPS 科研費 21520284 の助成を受けたものである。